

6月は雨が多く病害が発生しやすい時期であるとともに、アザミウマやサビダニといった重要害虫の発生が多くなる時期でもあります。雨が多いこの時期は薬剤散布のタイミングに苦慮されているかと思いますが、防除が遅れて被害を増やさないよう、これまでの発生状況をふまえて計画を立て、適期防除を心がけましょう。

「果樹全般」

●果樹カメムシ類

4月号から繰り返しお伝えしておりますが、本年は果樹カメムシ類の越冬量が多く、8月上旬ごろまでは越冬世代による園地への飛来が懸念されます。引き続き園内をよく観察し、飛来が確認されたら薬剤による防除を行ってください。なお、防除薬剤の効果は通常10日～2週間程度持続しますが、薬剤によって耐雨性が異なります。例えばスタークル(アルバリン)顆粒水溶剤2,000倍やマブリック水和剤2,000倍は30mm、テルスター水和剤1,000倍は100mm程度の降雨で効果が低下します。そのため、最終散布から2週間経過した後、もしくは園地の降雨量が上記の値を超えた後は必ず園地内を見回り、新たな飛来を確認したら薬剤を再散布してください。

また、果樹カメムシ類に対する薬剤を散布した後にハダニ類やカイガラムシ類の発生が多くなることもあるため、これらの害虫についても観察し、発生が多くなった場合はその害虫に登録のある薬剤を散布してください。

「露地カンキツ」

●黒点病

本病は、曇雨天が続き、降雨量が多い年に多発します。今年4月時点の気象庁の3カ月予報では、6月までの降雨量は「平年並」か「多い」とされており、本病の発生が懸念されます。本病の発生を抑えるためには、①菌の発生源となる伝染源の除去、②散布した薬剤の効果が低くなる「累積降雨量」を超える前に薬剤散布の2点が重要です。

① 伝染源の除去

まず、樹上の枯れ枝や園内及び園の近くに放置されたせん定枝などの伝染源を除去し、園外で処分します。園内に残ったままの切り株も伝染源になるため、伐根するか、ポリ袋で全体を覆って雨に当たらないようにして、病原菌の胞子が飛散しないようにしてください。

② 薬剤散布

薬剤は、累積降雨量(前回、本病の薬剤散布をした後の雨量の合計)を目安に定期的に散布してください。累積降雨量は園ごとに異なるため、可能であれば各園内に簡易雨量計を設置して確認してください。

薬剤は、マンゼブ水和剤(ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤)を使用してください。本剤を単用で散布する場合は散布後の累積降雨量が200～250mmを目安に、マシン油乳剤を加用して散布する場合は累積降雨量が300～400mmを目安に次の薬剤を散布してください。なお、薬剤の効果の持続期間は雨が少なくても1か月程度なので、上記の雨量に達しなくても散布1か月後を目安に次の薬剤を散布してください。

マシン油乳剤を加用して散布した場合、散布2～3日後までに雨が降ると薬剤の成分が雨水に溶けやすく、有効成分が流れて付着量が少なくなる可能性があります。そのため、散布後の天気予報にも注意して散布計画を立ててください。黒点病の薬剤散布時にマシン油乳剤200倍を加用することで、ミカンハダニの発生も抑制することができます。ただし、マシン油乳剤の使用は、6月下旬までとします。

●かいよう病

前年かいよう病の発生が多く、越冬病斑が多いこと、4月の3か月予報で雨が並～やや多いと予報されていることから、本年も発生が多くなることが予想されます。本病にかかりやすい品種(中晩柑類、高糖系温州)の植栽園、昨年本病が発生した園、風当たりが強い園、幼木・高接ぎ園では発病しやすいため、コサイド3000 2,000倍、フジドーLフロアブル500倍、クプロシールド1,000倍等にクレフノン200倍を加用して散布してください。

●ミカンサビダニ・チャノキイロアザミウマ

6～7月は、新葉上で繁殖したミカンサビダニが果実へ移動し始める時期であり、チャノキイロアザミウマの飛来が多くなる時期でもあることから、果実被害を防ぐ重要な時期です。

ミカンサビダニとチャノキイロアザミウマを同時防除する場合はコテツフロアブル4,000倍、マッチ乳剤3,000倍、ハチハチフロアブル2,000倍等を散布してください。ミカンサビダニのみを防除する場合はサンマイト水和剤3,000倍等を、チャノキイロアザミウマのみを防除する場合はアドマイヤーフロアブル2,000倍、エクシレルSE5,000倍等を散布してください。なお、サンマイト水和剤にマシン油乳剤を加用すると、ミカンサビダニに対する防除効果が低下するので混用しないようにしてください。

●カイガラムシ類

この時期は若齢幼虫の発生期にあたりますが、種によって発生時期が異なりますので、園地での発生種に応じた対策を行ってください。

・マルカイガラムシ類(ヤノネ、ナシマル、アカマル)

近年多発生して被害が増加傾向にあります。第1世代の防除適期は若齢幼虫の発生盛期にあたる5月下旬～6月上旬ですが、4月のアプロードフロアブル+マシン油乳剤の混用散布や5月の防除を実施できていない場合は、6月上旬までに必ず薬剤による防除を行ってください。なお、成虫に対しては薬剤の効果が高いため、既に

成虫が多数確認される場合は第2世代若齢幼虫の発生期(7月中旬～下旬)にも薬剤による防除を必ず行ってください。

・ルビーロウムシ

県全体での発生は多くありませんが、一部の園地で多発生している事例が確認されます。本虫の発生は年1回で、若齢幼虫の発生が終息する7月中下旬ごろが防除適期とされていますが、多発生時には1回の散布では防除しきれないことがあります。昨年多発した園地では7月の防除だけでなく、若齢幼虫の発生が多くなる6月中下旬にアプロードフロアブル(水和剤)1,000倍やモベントフロアブル 2,000倍、トランスフォームフロアブル 2,000倍等による防除を行ってください。

「ハウスミカン」

●アザミウマ類

果実の着色が始まるとミカンキイロアザミウマ、ネギアザミウマ、ハナアザミウマ類による被害が発生します。これらのアザミウマは園内外の雑草で増殖しますので、果実の着色が始まる前に園内外の除草を徹底してください。併せて、ハウスの周囲を1～2m幅のタイベックシートでぐるりと囲むように設置したり、ハウスの開口部に赤色等の防虫ネットを設置したりすることで園地への侵入を防ぐことができます。

なお、アザミウマ類は種類ごとに効果的な薬剤が異なるので(表1参照)、ハウス内に発生している種類を確認し、薬剤を選択してください。種類の確認方法が不明な場合は、各地域の指導機関(農業振興センター等)に問い合わせてください。

表1 ハウスミカンのアザミウマ類防除薬剤

アザミウマの種類	薬剤名	IRAC※ コード	希釈倍率	収穫前日数
ミカンキイロアザミウマ 及びネギアザミウマ	ディアナWDG	5	10,000倍	前日まで
	スピノエースフロアブル	5	4,000倍	7日前まで
	ファインセーブフロアブル	34	2,000倍	7日前まで
	アベンジャーフロアブル	34	2,000倍	7日前まで
ミカンキイロアザミウマ	コテツフロアブル	13	2,000倍	前日まで
ネギアザミウマ	ハチハチフロアブル	21A	2,000倍	前日まで

※殺虫剤抵抗性対策委員会(IRAC)が定めた作用機構に基づく分類コード

●ミカンハダニ

収穫2週間前を目安に、ダニオーテフロアブル 2,000倍、ダニコングフロアブル 2,000倍やバロックフロアブル 2,000倍等を、完着期以降はダニゲッターフロアブル 2,000倍や粘着くん液剤 500倍等を散布してください。な

お、先月号までも繰り返しお伝えしていますが、薬剤感受性の低下を避けるために同じ系統の薬剤は年1回までの使用としてください(気門封鎖剤を除く)。

●果実腐敗防止対策

収穫7～10日前に、必ずベンレート水和剤4,000倍またはトップジンM水和剤2,000倍のいずれかとベルクートフロアブル2,000倍を混用散布してください。薬液が霧状に出るノズルを使用し、果実1つ1つを薬液で包み込むようにムラなく散布することが重要です。

果実腐敗は、果皮の傷から病原菌が感染して発生します。収穫の際は、果実をハサミなどで傷付けたり、運搬の際に傷付けたりしないように丁寧に扱ってください。なお、アザミウマ類による傷果や収穫時の傷果は腐敗するおそれがあるため、傷果は収穫物に混入しないように注意してください。

また、緑かび病の発病果をハウス内に放置したままにすると、発病した果実から菌が飛散して園内に蔓延します。樹上の発病した果実や腐敗して落下している果実は、見つけ次第取り除き、ハウス外で処分してください。

「ナシ」

●黒星病

本病の発病葉や発病果は周囲への伝染源となるため、見つけ次第取り除き園外で処分してください。6月中旬頃までは、輪紋病との同時防除を兼ねてキノンドーフロアブル1,000倍、フロンサイドSC2,000倍等の薬剤を散布してください。

6月中旬～7月上旬頃は、本病の果実での発生を抑える最も重要な時期です。本病の発生の有無に関わらず、必ずスコア顆粒水和剤2,000倍等のDMI剤を、かけムラのないよう散布してください。

●ニセナシサビダニ

6月は本虫の寄生密度が高くなるため、ダニトロンフロアブル2,000倍またはハチハチフロアブル2,000倍等を、本虫の主な寄生部位である新梢の先端まで薬液がしっかりかかるように散布してください。また、散布後も新梢の伸長が続いている場合は、新たに展葉した葉での増殖を防ぐため、1回目散布後の2週間後を目安に2回目の散布を行ってください。

●シンクイムシ類

ナシヒメシンクイ対策として既に交信かく乱剤の設置は完了されているかと思いますが、交信かく乱剤の効果が無いモモノゴマダラメイガ対策として、6月上旬にスミチオン水和剤40～800倍や、ノーモルト乳剤2,000倍等を散布してください。

「ブドウ」

●袋かけ前の防除

晩腐病には果実小豆大頃までにオンリーワンフロアブル 2,000 倍等、べと病が問題となる園では、果実小豆大頃までにリドミルゴールドMZ 1,000 倍等を散布してください。

チャノキイロアザミウマにはアディオフロアブル 1,500 倍等を散布します。本虫は若い柔らかい葉や伸梢を好んで寄生するため、耕種的防除として、副梢の摘心を徹底するとともに、副梢の2番花(果)房は見つけ次第取り除きます。特に、シャインマスカットは本虫による被害が多いので、薬剤散布とともに耕種的防除を徹底してください。

●袋かけの注意点

摘粒後、できるだけ早く袋掛けを行います。ただし、降雨などで果房が濡れている場合は果房が乾いてから袋掛けを行ってください。濡れたままの果房に袋掛けすると、晩腐病の発生を助長する恐れがあります。

なお、袋の止め口が緩かったり、締めてもその上の袋口が雨などが溜まるように広がっていたりすると、雨水とともに病原菌が袋内に流入しやすくなります。袋掛け時には、針金を止め口の上部まで回して雨滴などが溜まる隙間が無いようにしっかり締めてください。

●袋掛け後の防除

袋掛け直後に、チャノキイロアザミウマ対策でダントツ水溶剤 4,000 倍やアルバリン(スタークル)顆粒水溶剤 1,000 倍等を、枝膨病対策でストロビードライフロアブル 2,000 倍を、べと病対策でボルドー液(ICボルドー48Q、ICボルドー66D)50 倍を散布してください。なお、ICボルドー剤にアピオンE 1,000 倍を加用すると防除効果が向上します。

また、袋掛け前に引き続き、チャノキイロアザミウマ対策として、副梢の摘心を徹底するとともに、副梢の2番花(果)房は見つけ次第取り除いてください。

「カキ」

●炭そ病

梅雨時期は主要な感染時期なので、ジマンダイセン水和剤 500 倍を散布します。その後は、累積降雨量 150 ~200 mmを目安に、ジマンダイセン水和剤 500 倍やエムダイファー水和剤 500 倍等を散布してください。本病は雨によって伝染し枝や果実に発生するため、薬剤は樹の上部まで十分かかるように散布してください。

なお、マンゼブを含む農薬(ジマンダイセン水和剤やペンコゼブ水和剤)の総使用回数は、カキでは2回までなので、総使用回数を超えないよう注意してください。

●害虫対策

カキノヘタムシがおよびフジコナカイガラムシの重要な防除時期です。スミチオン水和剤 40 1,000 倍、モスピラン顆粒水溶剤 4,000 倍等を散布してください。

なお、6 月はフジコナカイガラムシが枝から果実に移動するとともに、第 1 世代幼虫が発生する時期です。第 1 世代幼虫は県内では6月上旬から発生が始まり、6月中旬に発生のピークを迎え、7月上旬に発生が終了します。多発生園では6月中旬と7月上旬の2回、薬剤による防除を行ってください。その際、フジコナカイガラムシが好む果実とヘタの隙間に薬液がしっかりかかるよう、丁寧に散布してください。

「キウイフルーツ」

●すす斑病

6 月は、葉および果実への感染を防ぐ重要な時期です。ベンレート水和剤 2,000 倍、ストロビードライフロアブル 2,000 倍等を、果実だけでなく、葉の表裏、棚面の上に伸びた枝先まで薬剤が付着するよう丁寧に散布してください。今の時期の防除が不十分になると、後々果実での発病が多くなってしまいます。また、枝が遅くまで伸長する樹では発生が多くなるため、枝が遅くまで伸長しないような新梢管理を行ってください。

●果実軟腐病

果実軟腐病は、貯蔵中や追熟中の果実が軟化腐敗し、品質に影響が大きい病害です。栽培中に症状は出ませんが、6～7月は重要な防除時期です。フロンサイドSC2,000 倍やアリエッティ水和剤 600 倍等を、果実だけでなく、棚上からもしっかりと散布しましょう。